2022 年度重点研究成果発表会資料一部改訂
2023/06/05

# 教師と子どもの信頼関係に関する研究
## ―哲学対話におけるファシリテーターのあり方に着目して―

福山市立大学教育学部　田中直美

**背景と目的**

近年，日本の学校教育においても，アクティブ・ラーニングの手法として，さらにはお互いに違いを認め合う共同体づくりの役割として，哲学対話や子どもの哲学(p4c)に期待が寄せられている。こうした効果を発揮するためには哲学対話の基盤に「信頼」がなければならないが，哲学対話における「信頼」や教師の態度についての研究蓄積が不十分であり，何に対する「信頼」が対話で生じているのか，また「信頼」をどのように計るのか整理する必要がある。

以上により，本研究では，(1)対話そのものの理論を研究し，対話者が信頼しているものを明らかにすること，(2)対話実践とインタビュー調査をおこない，対話者が信頼や安心できる場を構築する際に，教師に求められる姿勢を明らかにすることを目的とした。

**研究課題(1)**

対話とはどのようなものかをローゼンツヴァイクの対話概念を理論的に研究し，対話者が信頼しているものは「わからなさ」「新しさ」などであることが明らかになった。

＊具体的な研究の成果は別紙の通りである。

**研究課題(2)**

対話実践は，本学の学生・大学院生から希望者を募り，「対話の時間」と称して授業時間外におこなった。当日の流れは次の通りである。研究の趣旨説明および倫理的配慮についての説明の後，哲学対話について簡単に説明し，ニックネームを決めて名札を作成した。その後，参加者全員で椅子を車座にし，全員の顔が見られるように座り，対話で使用するボールを作りながら自己紹介をおこなった。全員で問いを出しあい，多数決によって問いを一つに決め，対話を開始した。今回は，「育つとしたら田舎か都会どっちがいいの？」というテーマで 30 分程度話し合い，ふりかえりシート案内をして「対話の時間」は終了した。インタビュー調査については，インタビューの中で教師の姿勢とは異なる新たな課題が生じてきたため，今後の課題としたい。

**今後の課題**

今回の研究にあたり，対話理論を踏まえた実践研究が希少であることが明らかになった。さらに，多様な方法で展開されている対話実践を一つの理論で分析する困難さがあることも明らかになった。そのため，今回の理論及び実践の成果を踏まえ，引き続き対話実践を続けるとともに，理論研究の対象を広げ，「対話」とは何か，「信頼」とは何かをいまいちど整理し，「対話」で何が起こっているのかについて研究をおこなう必要がある。そのうえで，教師に求められる姿勢を今一度考えたい。